

甲状腺外科草子 125

本多平八郎の遺訓：桑名

杉野圭三

徳川家康配下の武将で最も人気があるのが、四天王の一人の本多平八郎忠勝であろう。



天文 17 年 (1548 年) 生まれ、初陣は 13 歳、生涯に 57 回の合戦を経験、かすり傷一つ負わず、武田信玄との「一言坂の戦い」では敵方より「家康に過ぎたるものが二つあり、唐の頭に本多平八」と賞賛された。

天正 18 年 (1590 年)、上総国夷隅郡大多喜 (千葉県大多喜町) に 10 万石の領地を与えられた。後に桑名 (三重県桑名市) へ移動 (10 万石) となり、旧領は次男・忠朝に別家 5 万石で与えられた。忠勝は直ちに城郭の修築、町割り、東海道宿場の整備を行ったとされる。



桑名城絵図

桑名城堀

桑名まで名古屋から約 30 分、現在の桑名に天守閣は無く、城址は九華公園として整備され堀と石垣が残る。有名な「七里の渡し」近くには蟠龍櫓が再建され、面影を留めている。



七里の渡し

蟠龍櫓

本多忠勝の像は公園のはずれの寂しい場所
にあり、訪れる人は少ない。愛槍は二丈 (約
6m) の長槍、刃長 43.8cm、穂先に止まった

蜻蛉 (オニヤンマ?) が真っ二つになった逸話から「蜻蛉切」と呼ばれた。鹿の角の兜 (鹿角脇立兜) に黒の鎧 (黒糸威胴丸具足)、肩から大数珠をさげていたと伝わる。



本多忠勝像

「どうする家康」の忠勝

大河ドラマ「どうする家康」で登場する本多忠勝の甲冑姿はほぼ正確に再現されている。本多忠勝は従五位下・中務大輔 (中書) に叙され本多中書家訓と呼ばれるものが残る。

「武士は唯々志きへ正道にて、武芸を嗜み勇猛なれば善き武士なりと教る也」

忠勝らしい極めて簡潔な家訓である。忠勝は慶長 15 年 (1610) 死去。63 歳。遺書と辞世の句が残る。

本多忠勝公御遺書：

侍は首とらずとも不手柄とも、事の難に至て不退、主君と枕を並べて討ち死にをとげ、忠節を守るを指て侍と申也。義理恥を不知輩は、物の吟味せざる故、幾度の首尾有候ても、一つも床敷くは思はず、禄を以て招く時は、譜代の主君をすて、二君に仕る輩あり。其れ心は物にふれ移りやすきものなれば、仮初にも侍道の外を不見聞、朝夕身を習し、武芸を心かけ、学文するも忠義大切を聞、兜の緒をしめ、鎗長刀太刀を提げ、天下の難儀を救はんと志すは侍の役也。

辞世：「死にともな 嗚呼死にともな 死にともな 深きご恩の君を思えば」

謀略に秀でた本多正信や生涯に主君を七回変えた藤堂高虎が苦笑しそうな、頑固で一徹な「三河武士」らしい言葉である。

参考資料：Wikipedia, 家訓で読む戦国 (小和田哲男)

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2025 年 1 月 9 日